

宗性が学んだ天台教学

松 本 知 己

一 問題の所在

東大寺の宗性（一二〇二～一二七八）は、鎌倉時代における華嚴宗屈指の学匠である。宗性の自筆本は約五〇〇点が現存し、その中には、法勝寺御八講等の法会において、他宗の学僧と論義を行う必要から書写した論義書等の文献が多く含まれる。天台教学研究の観点から注目すべきは、宗性が、延暦寺の智円（一二〇一～一二六八）等から借覧し、書写した論義書等の抄出文献が少なからず現存することである。鎌倉期以前の天台教学の論義書がほとんど散佚している現状に鑑みれば、宗性が書写した文献が有する意義は大きい。⁽¹⁾しかし、論義への出仕が目的である関係上、その研鑽は体系的とは言いがたく、抄出された記述の脈絡を見出しにくい部分も多い。そこで、本論文では、「三大部私記」を著した証真（一二三一頃～一二二〇頃）の著作の受容形態を検討する。宗性が書写、抄出した天台関連の文献全体を概観するに、証真の教説は散

見する程度である。しかし、建長二年（一二五〇）乃至五年（一二五三）にかけて抄出した『天台宗疑問論義用意抄』第二乃至第六には、比較的多くの引用が確認できる。特に第六には、ほぼ全編にわたり証真の『止観私記』が引用されるなど、建長年間には、宗性が意識的に証真の著作を披見したことが推測される。以下『天台宗疑問論義用意抄』第六における習学の様相を中心に、彼が学んだ天台教学の一端を明らかにする。

二 宗性による天台教学習学の傾向

宗性を含め、当時の南都北嶺の所謂四箇大寺の僧侶が公請によって出仕する格式の高い法会の特徴は、以下のとおりである。講問論義においては、南都と北嶺の僧侶が対論し、講師は各自の宗派の教学上の論点に関し、他宗所属の問者からの問いに答える仕組みであった。論題は、原則として、経文の理解を問う問題と、各宗派の中国の祖師達の教説、或いは

著作の記述の理解に関する問題が出題される。発問する側も、講師が専門とする教学に無知でいることは許されず、当時の学僧達は、諸宗の教学に精通することになった。⁽²⁾

右のような傾向から、習学すべき天台教学の範囲は、中国天台の教説、すなわち天台三大部や、湛然の註釈の理解が中心となる。そこに、湛然の教説の理解のために、門下の末註が加わる。宗性の書写にかかる天台関連文献のうち、単独の著者によるものが、道暹の『法華經文句輔正記』のみであるという事実からも、習学の深度は看取することが可能である。ただし、右に述べたように、宗性が天台教学を学ぶにあり、資料を提供したのは、智円など天台宗の学僧である。それを通じて、同時代の日本天台の教学が宗性の視野に入ってくることは、自然な成り行きともいえる。以下、証眞の教説の受容の形態を検討する。

三 証眞の著作の抄出について

宗性は、建長五年（一二五三）五月四日から五日間にわたって開催された仙洞最勝講に出仕した。第二日暮座の問者として、延暦寺の経海と、「問。雑心論意、可_レ許_二欲界有_レ定義_一耶。答。不_レ許_レ之也。」という問答を行っている。欲界における定の諸否については様々な立場がある。『雑阿毘曇心論』では容認するか、という問に対し、これを否定する議論であ

る。『仙洞最勝講并番論義問答記』によれば、問者からは、慧思『法華經安樂行義』の無相行に関する「諸余禪定三界次第。從欲界地、未到地……是阿毘曇雜心聖行。」（大正四六・七〇〇頁上）との記述を根拠とする問難が行われている。

宗性は、これに先立つ四月下旬に、この問答の典拠を含めた詳細を、『仙洞最勝講疑問論義用意抄』第六として用意した。事後の建長五年十一月五日には、『仙洞最勝講論義抄』第六をまとめた。前者には、問答の要文として、右の『法華經安樂行義』、『雑阿毘曇心論』卷七（大正二八・九二八頁中）及び卷八（大正二八・九三八頁下）九三九頁上）、『大智度論』卷七（大正二五・一一〇頁中）、僧侃『智度論疏』卷二末の記述に加え、『摩訶止観』卷九上の文と、湛然の『止観輔行伝弘決』及び証眞の『止観私記』の註釈を列挙している。後者の『仙洞最勝講論義抄』にも同じ論義が収録され、要文は大幅に増広されているが、やはり『摩訶止観』以下の記述を見出すことができる。ちなみに、前者における『摩訶止観』及び『止観輔行伝弘決』『止観私記』の引用を示せば、次のとおりである。

止観九云、若依_二成論_一、無_二未來禪_一。故云、汝說未來禪、將非_二我欲界定_一。毘曇則有_二尊者瞿沙_一。釈論具出_レ之。仏備_二兩說_一、而論主偏申耳。（大正四六・一一八頁下）

弘決九云、若依下、弁_二未來有無_一。先出_二二論_一。論家唯明_二欲定_一。

宗性が学んだ天台教学（松本）

九四

即指「毘曇所明未来祇是欲定」。意者、斥「他毘曇無未来禪」故也。毘曇有者、指「尊者瞿沙所説」。非「無憑拠」。釈論下次引「釈論」準「仏意」説。不「同」二論随「物偏伸」。（大正四六・四一四頁上）

止観私記九云、文若依成論無未来禪等者、……初禪根本前必有「方便定」。於「此少定」二論不「同」。毘曇依「此斷惑証理」、即為「一定無漏依地」。若成論意、從「欲界定」入「根本禪初門」。雖有「少定」不「留」此定、即入「根本」。故不「別立」。……文尊者瞿沙等者、……慧遠・僧侃等古師、皆云「瞿沙立欲界定」。応「有」出處也。更檢毘曇有者指瞿沙非無憑拠等者、……未到是色定。欲定是欲界。是故二定不「可」相濫。何引「瞿沙」始分「二別」。（仏全二二・一一〇一頁上―一一〇二頁下）

宗性が『摩訶止観』の説示に着目した理由は、欲界定を肯定する尊者瞿沙の説が『大智度論』に詳説される、とする点にある。ただし、『大智度論』には明確な典拠はなく、『止観輔行伝弘決』も「非「無憑拠」とするに留まる。証真の『止観私記』は、『雑心論』には欲界定は説示されない、という立場を明確にした上で、尊者瞿沙の説の典拠は未詳であるとしながら、問答を重ねることで『摩訶止観』及び『止観輔行伝弘決』の説示の意味を斟酌している。換言すれば、『止観私記』の記述により、『摩訶止観』等の説示の意味の理解が容易になるのであり、『止観私記』引用の理由はここにあると思われる。

これだけでは宗性と証真の関連性は判然としないが、この

年の仙洞最勝講のために宗性が行った研鑽の内容の一部は、『天台宗疑問論義用意抄』第六に示されている。本書は、「建長五年六月十四日^{時末}、於「東大寺尊勝院中堂正面」抄之畢。去五月参勤仙洞最勝講之時、自「延暦寺智円法印之許」借「請天台宗文釈」之次、不審之釈処々驚之、至要之文少々写之。……」という奥書によれば、仙洞最勝講の後、六月一四日に著された。智円から借用した「天台宗文釈」を研究した際、要文を写したものである。四三紙のほぼ全編が、論義の論題、或いは問答を記したのち改訂し、『摩訶止観』所説の十境のうち、禪定境を説示する巻九上下の文と、『止観輔行伝弘決』、及び『止観私記』の記述を抄出するという形式を採る。所収の論題は次のとおりである（番号は筆者が付した）。

- ① 建長元年仙洞最勝講円順問宗源法印問。經文付説三身功德。今經所説応身者、宗家所立三身中何也可云耶。答。
- ② 問。雑心論意、可「立」欲界定「耶」。答。不「立」欲界定「也」。
- ③ 元久三年仙洞最勝講聖覚問隆円已講問。成実論意、依「下三無色」入「見道」歟。答。爾也。
- ④ 問。宗師解釈中、以「欲界定」亦名「金剛三昧」^文。爾者妙樂大師如何釈「智耶」。
- ⑤ 建暦三年最勝講経円問頭尊大僧都問。大集經意、第二静慮可立「内浄支」耶。
- ⑥ 問。成論意、有学聖者可「得」第八解脱「耶」。

⑦問。婆沙論意、退_二阿羅漢果_一時、必可_レ退_二中間二果_一耶。

⑧天福二年法勝寺重尊問信承僧都

問。止觀中明_二四果退不退相_一云、三果退_レ戒還_レ家毀_二失律儀_一文
爾者何經說耶。……答。

⑨問。妙樂大師解釈中云、背捨在_レ因、解脫在_レ果_文 爾者依_二何論
文_一証_二此義_一耶。

⑩問。毗曇意、初_二背捨依地可_レ通_二欲界_一耶。

⑪嘉祿元年法勝寺良盛問頼兼律師

問。成実論意、分_二別惠解脫俱解脫_一、依_二滅尽定得不得_一歟。答。

⑫問。後四勝処所觀色可_レ通_二仮実_一耶。

⑬問。麟喻独覺可_レ値_二仏出世_一耶。

⑭問。瓔珞經所_レ說六輪中可_レ有_二鉄輪_一耶。

⑮問。止觀中云、普賢文殊大人所乘故名_二大乘_一文 爾者何經論說
耶。……答。

『摩訶止観』や『止観輔行伝弘決』における三界内部の実
践に関する記述の理解を問うものが多く、②、③以外は、答
の立場が記されない。また、①、③、⑤、⑧、⑪は、右肩の
記載のとおり、最勝講、仙洞最勝講、法勝寺御八講の三講で
過去に出題された論題である。なお、①には『止観私記』の
引用はなく、傍線を付した②の問答、すなわち、建長五年の
仙洞最勝講で宗性が発問した論題の後には、『法華經安樂行
義』だけが引用されている。引用はいずれも長文であり、比
較的短い①の記述を例示すれば、次のとおりである。

嘉祿元年法勝寺良盛問頼兼律師

宗性が学んだ天台教学（松 本）

問。成実論意、分_二別惠解脫俱解脫_一、依_二滅尽定得不得_一歟。答。
兩方。若依_二滅尽定得不得_一者、止觀中云、成論得_二電光一名惠解
脫_一、具得_二世間禪一名俱解脫_一文 如_二解釈_一者、成実論意、分_二別
惠解脫俱解脫_一、不_レ依_二滅尽定得不得_一見。若依_レ之爾者、正見_二成
実論文_一云、因_二滅尽定_一故有_二二人_一。不_レ得_二此定一名惠解脫_一、得_二
此定一名俱解脫_一文 如何。答。

（改丁）

止観九云、毗曇明、得_二滅定_一是俱解脫、不_レ得_二此一定_一但名_二慧
解脫_一。成論得_二電光一名慧解脫_一。具得_二世間禪一名俱解脫_一。（『摩
訶止観』卷九上、大正四六・一二三頁下）

止観私記九云、文成論得電光名慧解脫具得世禪名俱解脫者、

問。彼論賢聖品云、因_二滅尽定_一故有_二二人_一。不_レ得_二此定一名慧解
脫_一、得_二此定一名俱解脫_一。此同_二毘曇_一。何云_二不同_一。

答。彼賢聖品且順_二毘曇_一。成論又云、但以_二如電三昧_一得_レ尽煩惱。
故慧解脫有_二諸禪_一、但不_レ入_二今依_レ此文_一。（『止観私記』卷九、仏
全二二・一一一六頁上）

『摩訶止観』卷九上で、慧解脫と俱解脫の分別が、毘曇と
『成実論』で異なると説示される点について会釈を求めている。

『成実論』卷一（大正三二・二四六頁下）では、滅尽定を
得るのが俱解脫とし、これは毘曇と同じ見解だからである。

ここで証真は『成実論』卷一二（大正三二・三三九頁下）の所
説を引用することで『摩訶止観』の説示を会釈している。

本書の構成から、次のことが看取しうる。すなわち、宗性
は、仙洞最勝講への出仕の準備の一環として、過去の三講以
下の論義における出題例なども斟酌しながら、「天台宗文釈」

を検討した。具体的には、右に見た論題の要文となるべき『摩訶止観』巻九上の文を含む観禪定境の範囲を研究した。座右に置いたのは、智円から借り受けた、証真『止観私記』（の記述）を含む天台教学の文献であつたろう。最終的に宗性は、右の②にあたる箇所を、仙洞最勝講の論題として採用し、想定される問答と要文を、予め『仙洞最勝講疑問論義用意抄』第六に記した。法会の後に、論義の問答の詳細と、後学のために残すべき典拠、或いは要文を増広した上で、『仙洞最勝講論義抄』第六に詳述した。そして、時期的には『論義抄』よりは早い、残る部分で宗性にとって「至要」と思われた箇所を、より簡略な形で、『天台宗疑問論義用意抄』第六にまとめた。本書の②に『止観私記』等の文を記さなかった理由は定かでないが、『安樂行義』の記述で足りるとみたか、或いは他の二書との重複を避けたのかもしれない。『天台宗疑問論義用意抄』第六を概観するに、宗性が、証真の著作の記述を、『摩訶止観』巻九の記述の理解の参考としたことは明らかであり、過去の法会で出題された論題の解釈の指針として重視したこともわかる。

さらに、右の過程からは、宗性の習学の方法を確認できよう。ある範囲についての論義や文献を広く収集し、選択し、事後に関心ある箇所を抄出するという仕方である。同様の傾向は、法華教主論の研究にも見出される。『諸宗疑問論義抄』

第一七によれば、建長四年五月一九、二〇日の弘誓院御八講に宗性は出仕し、問者として、延暦寺の信承と、「問。法花教主三身中為_レ報身、為_レ当可_二応身_一耶。答。此事雖_レ有_二学者異議_一、且可_レ存_二応身云義_一也。」という問答を行った。同書には、『法華経』の教主を報身とする立場から応身説に対する八項目の問難が収録されている。この基盤となったのが、智円から借覧した『法華教主抄』であり、「法華教主事 以_二真言教_一可_レ同_二法花_一事」という内題をもつ要文集が付属する。この文集は、『大日経』『大日経疏』や円珍『大日経疏抄』『胎金瑜伽記』『阿字秘釈』、安然『教時問答』など密教に立脚した記述を含む五三文から成る。弘誓院御八講での論難には密教色は全く見られない。宗性は、事前には台密の教説も研究した上で、それらを用いずに論難を作成し、事後に『法華教主抄』を抄出したことになる。

四 小結——今後の課題——

以上、証真の著作の受容の形態に着目しながら、宗性による天台教学習学的一端を具体的に明らかにした。彼の研鑽においては、法会における論義と習学、それに基づく論義抄等の作成が、分かちがたく結合している。今後はより広く、各種問答記や論義抄を相互参照しつつ、その作成の過程と範囲を明らかにすること、及び背後に広がりを見せる南都北嶺の

僧侶達による知の共有の態様を解明することが課題となる。例えば、『諸宗疑問論義本抄』第五には、『法華経』妙莊嚴王本事品で聞品の功德とされる「法眼淨」（大正九・六一頁上）を大乘の得益と解する立場の典拠として、『本理大綱集』の「一代五時五時説之文」が「伝教」すなわち最澄の説として引用され、「宝治二年七月六日、定尊阿闍梨勘送之」との注がある。また、『諸宗疑問論義抄』第二一には、建長六年（一二五四）の西園寺御八講で、宗性自身が、興福寺の頼円に対してこの論題を発問したという記録があり、典拠として、この文が引用されている。最澄に仮託される『本理大綱集』は、本覚思想文献としては初期の成立と推測されているが、現存文献上確認しうる初出は、従来、日蓮（一二三二—一二八二）『本理大綱集等要文』における「十界互具文」の引用とされてきた。その成立時期は、文永元年（一二六四）乃至建治二年（一二七六）と解されている。⁽³⁾しかし、宗性は宝治二年（一二四八）に得た、と記しているので、それ以前に、『本理大綱集』が最澄の撰述として、少なくとも一部は流通していたことの証左となる可能性がある。なお、証真教学の研究という観点からは、他宗の学僧による最初期の受容例としての意義を有する。さらに、紙数の関係で全く言及できなかったが、当時の天台宗の論義における問答を、宗性は多数抄出している。これらの内容の検討も、今後の課題としたい。

宗性が学んだ天台教学（松本）

1 尾上寛仲「鎌倉時代の南都仏教と天台教学の交渉」（『天台学报』八、一九六七）。尾上氏によれば、智円から借覧したのはおおよそ三一点である。
2 永村真「中世寺院史料論」（吉川弘文館、二〇〇〇）、袁輪顕量『日本仏教の教理形成』（大蔵出版、二〇〇九）等、参照。また、袁輪顕量『法勝寺御八講問答記』にみる論義再考」（『印度学仏教学研究』六〇—二、二〇一二）参照。
3 例えば、山中喜八「本理大綱集等要文」（『大崎学报』一一九、一九六五）。

〈キーワード〉 証真、三講、『本理大綱集』

（早稲田大学非常勤講師・博士（文学））